

体外衝撃波は上腕骨小頭離断性骨軟骨炎の手術治療回避に有用か？

中里 伸也¹ 島田 幸造²

¹医療法人 N クリニック ²JCHO 大阪病院整形外科

Is the Extracorporeal shock wave therapy (ESWT) useful device to avoid surgical treatment of the Osteochondritis dissecans of the Humeral Capitulum ?

【目的】

上腕骨小頭離断性骨軟骨炎(肘 OCD)に対する体外衝撃波(ESWT)の治療成績を分析し、成績に影響を与える因子を調査して ESWT が手術治療の回避の点で有用であったかを検証する。

【対象と方法】

当院で 2018 年 8 月から 2020 年 8 月まで ESWT 治療を行い追跡可能であった肘 OCD 20 例 20 肘を対象とした。平均年齢は 12.9 才(11-16) 男性 17 例女性 3 例。スポーツ種目は野球 15 例、体操競技 2 例、ソフトボール 1 例、剣道 1 例、BMX1 例であった。初診時単純 X 線像による分類で透亮期 5 例、分離期前期 9 例、分離期後期 6 例。予め遊離期は適応から除外した。完全修復したものを Excellent 不完全修復したものを Good 修復は認められるが不安定なものを Fair 全く修復が認められないものを Poor とし、Excellent と Good を修復あり、Fair と Poor を修復なしとした。

【結果】

Excellent 5 例 Good 7 例 Fair 8 例 Poor 0 例 修復ありは 20 例中 12 例で修復率は 60%であった。透亮期の 5 例全てと分離期前期の 9 例中 6 例、分離期後期でも 6 例中 1 例で修復ありであった。修復ありの 12 例中、上腕骨小頭の骨端線閉鎖前が 10 例と多かったが、骨端性閉鎖後でも修復ありが 2 例あった。

【結論】

今回の対象症例において、ESWT により透亮期全例と分離期前期の特に骨端線閉鎖前の多くで修復が見られ、また分離期後期や骨端線閉鎖後でも修復した症例があった。以上から ESWT は肘 OCD 病巣の修復を促し、手術治療回避またはより小侵襲な治療への誘導に寄与する可能性がある。
